

座談会 東京助産師

「赤ちゃん訪問」

於…千葉県流山市

大震災後、気仙管内（大船渡市、陸前高田市、住田町）を駆け回り、赤ちゃん訪問をしていたのは東京都助産師会に所属し、「一般社団法人ジェスパール」から派遣されていた四人の助産師でした。片道五〜六時間かけて東京から足を運び、二泊三日の日程で月に一〜二回、できる限り被災地で赤ちゃんとお母さんを訪問して回りました。助産師としての強い思いや使命感がなければできなかったことです。活躍した四人の助産師と現地の伊藤代表で、赤ちゃん訪問を振り返りました。

実施期日…平成二十八年七月二十三日

場所…千葉県流山市「おおたかの森助産院」山本正子院長宅

参加者…渡邊寛子、山本正子、熊澤貞子、遠藤恵子、伊藤怜子&ライター平地紘子

助けを求めている赤ちゃん、お母さんはどこに？ 立ちはだかった個人情報壁

渡邊…赤ちゃん訪問は、伊藤代表の「この被災した地域には、ママサロンに来たくても来られないお母さんと赤ちゃんがまだいるはず」という熱い思いから始まりましたね。

伊藤…ママサロンを開いてみると、「サロンに来れるお母さんたちは、まだ車も、時間も前向きな気持ちもあるお母さんたち、本当に困っているお母さん方がサロン迄来れない、サロンの存在も知らない」ということがよく分ったんです。でも、現

地の助産師は直接的、間接的に被災した人ばかりで、赤ちゃん訪問をボランティアでできる人は、もう地元にはいなかったんです。でも、訪問の必要性は切実に感じていて…。だからここにいらっしゃる皆さんが駆けつけてくれた時は、本当に後光が差すように有難かったです。現地だけではとてもこのような活動はできませんでした。

渡邊…一番大変だったのは赤ちゃんを探すことでしたよね。どこの仮設住宅にいるのか、どこのみなし仮設に赤ちゃんがいるのかわからない。行政に聞いても個人情報という事で教えてくれないし、一軒一軒

訪問して探すしかありませんでした。

熊澤…仮設がどこにあるのかという情報ですら、最初はなかったんですものね。

伊藤…市役所は情報を一切出してくれませんでしたね。ようやく仮設住宅にたどり着いても、仮設管理の方は個人情報を守る盾に一切教えてくれなかったり、対応の支援員さんによってはそれらしい情報をながしてくれたり、その時々で赤ちゃんとの出会いが変わって…。



前列左から山本、伊藤 後列左から熊澤、渡邊、遠藤

遠藤…もともと同じ地域だった方々が集まっている仮設では「赤ちゃんあそこにいるよ」と教えてもらえました。いろんな地域の人が集まっている大きな仮設住宅では、責任者に「個人情報があるので伝えられません」と、バツチリ断られたりしましたね。

渡邊…自分たちで情報を得るしかなかったんですね。だから私たちが一軒のお宅に赤ちゃん訪問をしている間に、シツプ号の運転手だった伊藤さんのご主人が周囲を歩いては「あそこに赤ちゃんの洗濯物がある！」と見つけてくれたりね。地道な作業の積み重ねでした。

山本…最初は「赤ちゃんを探せ!!訪問」みたいでしたよね。全部の仮設住宅を回り、安否確認のように赤ちゃんがいるかを確認していく。東京から二泊三日で行って回っても、赤ちゃんに一人も会えない時もありました。でも「ここには困っている人はいない」ということを確認するだけでも意味がある活動だったと思います。自己満足かもしれないですが、それを行っているところはどこにもなかったから。

渡邊…回っていて、不審者のような扱いをされたこともありましたがね。震災後はいろ



陸前高田市小友柳沢仮設住宅団地にて（山本さん・熊澤さんと蒲生さん）

いろな人が現地に入ってくるのでそれもあるのですが、「私たちは不審者ではないよ」と伝えようとしても信頼して頂けなかったのは、私たちが行政と結びついていないからなのかな、とも思いました。

山本…もし今震災がもう一回起きてこれから赤ちゃん訪問をするとなったら、行政は今の子育てシツプには情報をくれると思うんです。NPO法人化して信用を得て、

大船渡市子育て支援センター「すくすくルーム」も立ち上げ、行政とも顔見知りにもなってますから。普段からいかに行政とつながって信頼を得ておくかも大切ですよ。

東京から来た助産師だからできた訪問、そして傾聴

渡邊…赤ちゃん訪問をしながら、震災を経験していない私がお母さんとお子さんに寄り添うことができるのか…難しさをすごく感じましたね。寄り添うにはどうしたらいいのか、傾聴の必要性を感じて地元の助産師さんにもお声掛けして東京の傾聴講座に参加していただきました。また、地元でも伊藤代表の働き掛けにより気仙管内の助産師・保健師さん方とともに臨床心理の先生をお招きして二回の傾聴講座も開催していただきました。たいへん好評でした。赤ちゃん訪問をしながら「なにか失礼な、ママを傷つけるようなことを言いはしなかったか…」と常に寄り添う事の難しさを感じての訪問でした。

遠藤…東京で行っている訪問の仕事は市町村から受けた仕事なので、お母さんたちが知らない情報をこちらから伝えることで喜



仮設住宅団地を訪ねて（渡邊さん）

んでもらっていた面がありました。被災地の地域情報を知らない私たちが、訪問する事の不安がありました。でも被災地ではとにかくお母さんの話をよく聞くという事、そして時間を共有することの大切さを学びました。訪問の原点を感じましたね。

熊澤..私も普段東京で訪問しているお母さんたちとは違い、震災で心に傷を受けているお母さんたちへの訪問は、最初は自分

できるのかとすごく不安でした。そのため活動に参加することを一度断ったくらいです。結局遅れて参加したのですが、震災で心の傷を負っているお母さんたちの話を聞くうちに、もっと早く関わっていたらよかったなと思いました。

山本..その点、それまで訪問の経験がなかった

私はちゅちゅすることなく飛び込んで、無我夢中でやってきたという面がありますね。でも、この訪問の経験が助産師としての活動の幅を広げてくれたので、今となっては自分たちの方が育ててもらったなと思っています。

伊藤..本当に人も物も状況も、悪条件がそろっているあの被災地の中でよくぞ三年三ヶ月も継続してできたなと思いますね。

山本..伊藤さんはよく「あなたたちだからできた」と言うんですけれども、そこには地元の助産師ではできない事情があったんですよね。岩手では、子育ても介護も家の中でやるのが当たり前。特に子育ては身内以外に頼むことは家の恥だという文化が根付いているんです。だからそういう文化で育ってきた地元の助産師さんには、

行政の訪問以外で勝手に人様の家へ上がって子育てを手伝ったり、家庭内のことも含めて話を聞くというのはいけません。そ

の文化を知らない私たちだからできた、ということなんです。

伊藤..地元では、世間様というのを大事にしますからね。でもそれも、災害後にすごく変わったんですよ。震災によってそんなことを言ってもらえない現実が来てしまったから。

遠藤..最初は支援物資のオムツを手渡すという

側面もあったのでおかあさんたちが「来てください」と手を挙げてくれた部分もあると思います。寄付していただいたものを行政を通さずに直接お母さんたちに手渡し、寄付してくれた方々の気持ちをお届けすることができたことは本当に良かったです。同時に、地元の助産師には言えない話もやっぱりあるんだろうなとも思いました。特に最後の一年は毎月のように継続して利用してくださっている方のところへ行っていて、そこでは家庭の事情に耳を傾けることが主でしたから。傾聴できたのはわからないけれど、話を聴くということを学びました。

熊澤..東京での訪問では夫婦と子供という核家族への訪問が多く、おしゅうとさんやお

しゅうとめさんとの関係性が問題になることはあまりないのですが、岩手では三世代、四世代が一緒に住んでいる家が当

たり前。今でも印象に残っているのは、お母さんの話を聞いている時におばあちゃんが出来て「自分ちの孫は自分たちでちゃんと守ってるのに、なんであなたたちが来るの」と否定的なことをガーツと言われたこと。東京とは全然違いましたね。だから「大家族の中でどう子育てをしていくか」という相談を受けても、なんて答えればいいのか…ということも結構ありました。傾聴してあげるしかなかったですね。

渡邊…とにかく傾聴なんですよ。お嫁さんからおしゅうとめさんの愚痴を聞いて「これはちよっとお嫁さんの方が…」と思っても、私たちはお嫁さんの味方ですから、味方として聞くことや共感することの難しさをすごく感じました。

伊藤…今みなさんは謙遜して傾聴の難しさを話してまずけれど、私たち地元の助産師は施設の中でしか働いたことがないので、訪問して母子をサポートする経験をしたことがないんです。そんな私たちに比べてらみなさんは訪問のスキルができている人たちなんですよ。お母さんたちに話をさせるスキルをしっかりと持っています。

渡邊…私たちの訪問で良かったことは、希望が



仮設住宅の妊婦さん訪問

あれば毎月訪問し続けたことでしょうか。行政の訪問は産後二回ぐらいで終りになります。私たちが「いやいや、もう終わりです」と断ることは一切しませんでした。何回でも行って、毎回同じような内容の愚痴を聴く。でもそれを繰り返した時に、子育てを楽しいと思えなかったお母さんが、次の子が生まれた時には「楽しくなった」「母親は完璧じゃなくていい」ということがようやくわかった」と言っ

てくれたんです。子育てに自信を持ってもらうことができたんですね。でも、それには時間がかかります。子育ては普通の人でも大変なのに、実家を流されたりという大変な背景があつての子育てなんです。それまでお母さんから遠ざかっていた上の子がお母さんにしがみつく姿を見てみると「この子育てシブは本当に行政はできない支援だったんだな」と思い、本当に嬉しかったですね。

災害時の鉄則は、被災者のところに「こちらから出向く」

伊藤…私は直接巡回には行かずに留守番していることが多かったのですが、橋や標識がなくなったり、地図が塗り変わっている被災地を車で走るわけですから、シブで巡回する危険性をいつも感じていました。だからいつも「今日も安全に無事に終わるかな」と心配していました。

熊澤…伊藤さんのご主人がドライバーとして私たちを連れて行ってけれなければ、この活動は継続していかなかったと思います。本当に助かりました。

山本…本当にそう思います。東京でアプリを見ながら車を運転するのは違って目印が柿

の木だったりしますから、土地勘がないと全然わからないんです。伊藤さんのご主人がいなかったらきつと回りきれなかったですね。

伊藤… 一番心配だったのは、渡邊さんや山本さんがレンタカーで単独で訪問された時でしたよ。

渡邊… 走行距離が一日一〇〇kmということもありましたね。

遠藤… 地図がないから、お父さんが手書きの地図を描いて「ここは、こうなってるから」と説明してくれてね。

山本… 場所がわからない時は、道端でお茶っこ（井戸端会議）してるおばあちゃんたちに声をかけて聞いたりしましたね。

渡邊… そうやって高齢者の方と出会えたのも良かったですよ。赤ちゃんには会えなかった時も高齢者の方たちが集まっている集会所とかで血圧を測ったり健康相談にものったりして。

山本… 赤ちゃん訪問の番外編、という感じですね。

渡邊… 高齢の方たちから「親戚の家が流されて、何万本と流れてきた防災林の松の木でつぶされた。あれさえなければ家の形は残ってたんじゃないか」っていう辛い思いを聞いたりしながら、その中でも一生懸命生きてらっしゃる姿に力をいただきました

たね。

遠藤… おばあちゃんが次から次へと震災の話や自分の気持ち、時には愚痴も話しているのを傾聴しながら「私たちは赤ちゃんだけじゃなくて、大人の人にも貢献してるような気がする」という場面もありました。

伊藤… 待っているのではなく、こちらから「出向く」というのは被災地では大事ですね。みんな動けなくなっているんだから、支援したい人が出向く。これが鉄則かなと思いますね。

渡邊… 私も、訪問という支援の仕方は必要だなと強く思いました。一軒あたりの訪問に二時間くらいかかるけれど、じっくりお話を聞けるんですよ。ですので、今回の教訓を今後にどう生かすかというときには、訪問事業がとても重要だと思います。助産師という資格があることで安心していただければ本当に嬉しいし、いろんなことをお話できるし。

遠藤… 私は今回の訪問で、仮設での子育ての大変さを痛感しました。子育てしていると「うるさい」と言われ、お母さんが行政に電話をすれば、「赤ちゃんを泣かせないように。泣いた時には窓閉めなさい」なんて言われたり。仮設の前で遊ばせる



「赤ちゃん訪問」(遠藤さん)

熊澤… 熊本の被災地の様子をテレビで見てもさうでしたよね。だから、赤ちゃんと子供の避難所っていうのも必要なのではと思います。

山本…被災地では指導者のトップは女性がやるべき、という声もありましたよね。ナプキンの必要性に気づかなかつたり、授乳中の人におにぎりを一つ多く渡す気遣いもできないとか。ぜひ行政にはこの点にも取り組んでほしいですね。

伊藤…それが一つの理想だと思うけれど、私は行政は行政であり、民間の力は欠かせないと思っています。だからその民間の力を行政がいかに支援するか、そこだと思っています。

渡邊…私は今東京都助産師会の災害対策委員をしているんですが、行政と話しをする中で感じているのは、最終的にはやっぱり自助なんです。自分の身は自分で守る。



赤ちゃん訪問（伊藤代表）

地震が起きたら死なない。死なないにはどうすればいいか。そして共助。平時にいかにご近所づきあいをするかというのが大切ですね。自治会でいかに日頃から備えるとか、炊き出しを年に一回やるとか、自治会レベルでやっていくしかないのかな。お互い顔見知りになつていると、災害が起きた時に「あそこに障害の方がある」「年寄りがいる」というのも把握できるんです。

伊藤…同時に、災害が起きた時に行政が平常時の情報の秘守を適用してしまつたら、かえって守るべきひとが守られないという事態になることも痛感しました。情報さえスムーズに受け取ることができたらもっとスムーズに活動できたとし、救われた人はもっとたくさんいたんです。それがすごく残念です。

渡邊…この経験を踏まえて今、東京の各助産師分会と行政との間で「災害があつた時に協力しますよ」という協定を結び始めています。協定を結んでおけば災害時の活動の際に有効なのではないかと。保険も出るようになるし、一緒に防災訓練もしておけば迅速な対応が可能になるかなと思っています。

熊澤…私が住んでいる府中市も東京都助産師会



巡回スタッフの研修会（大船渡市内）

と組みました。危機管理ということで各市町村も動き出していますよね。

渡邊…全国に波及できればいいなと思います。災害が起きた時に、病院勤務の助産師は病院にかかりきりになるので、地域で仕事をしている助産師の中で協力して頂ける方と協定を結んでいるのですが、地域によって助産師の数が少なかつたりと課題は多いですね。でも、「赤ちゃん訪問」での経験をできるだけ生かせるように今後取り組んでいきたいと思っています。

体験談・ママと助産師の被災体験

Mさんの場合（聞き取り・渡邊 寛子）

Mさんは、震災で実家を失いました。震災後に結婚をされご主人様の実家に同居し、仕事を続けながら妊娠出産をされ、出産後は仕事に直ぐ復帰されるなど環境が目まぐるしく変化された方でした。育児に熱心なご主人様から毎月、日曜日の訪問のご依頼を受けました。訪問当日はいつもお二人揃ってお待ちくださいました。お子様の発育はとても順調でご主人様や両家のサポートにも恵まれ子育ては順調に見えました。が、環境の激変の中、慣れない育児にフルタイムの仕事、お姑さんとの育児の違いや几帳面な性格も重なり、常に「育児に自信が持てない」「育て方がわからない」の訴えが長く続きました。それから一度の流産を経験され、第二子は大量出血の難産でした。

Mさんはこの時の心境をこう語っておられます。「赤ちゃんの生活に慣れない…みんな子育てができているのに私は基準がわからない、頑張って世話をしても子どもはなつかないし、子

どもがいても楽しくなかった。第二子が生まれると、上の子のいやいや期、あかちゃん返りも大変で下の子は体調が悪いと近寄ってこなくなるし…自信を無くした。保育園に預けられなかった二か月は、母の実家に預けたが大変だった。自分はできていない、どこまでやれば、どこで手を抜けばいいのかわからない。ギャーギャー泣くし離乳食も一生懸命作った。楽しくなかった…。」

また、上のお子様が一歳六か月になる今の気持ちちは、「上の子が料理を手伝ってくれるようになり可愛くなった。一人だった時より二人のほうが遊んでくれるので楽です。今まで子育てを一度も楽しいと思ったことがなかったけど二人目が生まれて母親は完璧じゃなくていいということがよくわかった。買物の帰りに買ったおやつを二人で食べたらとても喜んでくれて…」そして「また、たべようねえ」と優しい眼差しで上のお子さんをぎゅっと抱きしめられました。その様子に目頭が熱くなったことを思い出します。

今、子育てしている母親の七割は不安と孤立

を感じていると答えています。小さなお子さんに接するのはわが子が初めてです。赤ちゃんにどう接したらいいかわからないのは当然です。育児に慣れるまでには時間がかかります。Mさんのようにお子様の発育が順調で周りにサポートがあり保育園に通っていても不安がいつぱいです。

こそだてシップの日曜日の訪問は、ご主人様に奥様の大変な思いも伝えることができましたし子育ての不安や辛さを皆で共有できます。自信にもつながります。Mさんのように日曜日毎月二歳になるまでの訪問は、行政にはできませんでした。

Aさんの場合（聞き取り・渡邊 寛子）

平成二十八年
六月二十九日。

三月十一日の
午後、自宅で次
女(当時十ヶ月)

の授乳中に大地震が起きました。すぐに次女を車のチャイルドシートに乗せ、避難用のカ



「シップ号」に支援物資を詰め込み（渡邊さん）



妊婦さん訪問（渡邊さん・熊澤さん）

住宅は一棟六棟続きの建物で、壁は石膏ボード、床はベニヤ板でどんなに気をつけているつもりでも、話し声や足音は直ぐに響いてしまいます。

「近所さんと顔を合わせた時には「いつも騒がしくてすみません」と挨拶していました。」

ご年配の方や同じ位の子育て世代の方は「賑やかでいいの！いいの！」と言ってくれましたが、隣に住む独身男性には「子どもの声がうるさい！」「親の声がうるさい！」「夜泣きさせるな！」等と言われました。

その男性は夜の商売の人で、夜中一時頃女性を連れて帰宅し、テレビ、話し声、生活音、色々とうるさく、子供達も起きてしまうこともしょっちゅうありました。時には夜中の怒鳴り合いもあり、壁にコップのような物が当たって割れる音まで聞こえてきました。

車進入禁止の住宅敷地内へ車を乗り入れる人も多く、子供を外で遊ばせるのも怖い状況で、いつも子供から目が離せませんでした。

そんな時、子育て支援の集まりがあり、子供たちを遊ばせた



り、助産師さんに話を聞いてもらったりすると、心が軽くなり、リフレッシュすることができました。とても感謝しています。

若いママたちの力強さと赤ちゃんの笑顔、地元の皆さまの熱意、そして青い海と山々、きれいな空気、大船渡市や陸前高田市の大自然の恵みにいつも感動し感謝しながら復興の大変さを感じつつの訪問でした。また、普通でも大変な子育てなのに大地震という甚大な被災の中での子育ては想像を絶します。傾聴の難しさを日々感じながら毎日が反省でした。至らない面もたくさんありました。たくさんのお事を教えられて学ばせていただきましたのは私たちの方でした。本当に心より厚くお礼申し上げます。

震災後六年を迎える今、震災直後の混乱の中でこのような素晴らしい活動を立ち上げてくださった「こそだてシップ」代表伊藤助産師さん、そして地元の助産師さん方、ボランティアの皆さんに深く感謝するとともに敬意を表します。ご支援下さった皆さまに心よりお礼申し上げます。

復興はまだまだ道半ばですが、十年先二十年先とても楽しみにしています。これからも「こそだてシップ」のご支援をよろしくお願い申し上げます。

平成二十九年三月二十日

訪問担当支援助産師 渡邊 寛子

パンやパン等の食料も車に積み込み、高台へある避難所へ行きました。

日頃から、避難用のカバンを用意していたので、困ることなく避難所ですごせました。

小さい子は津波で家が無くなったことも分らず、避難所でもすぐに飽きてしまうので、つききやブロック等の少しのオモチャを持って行ったのがとても役に立ちました。余震が続くなかでも両手に積み木を握り締めて、耐えていた姿が今でも忘れられません。津波で家は跡形なく流されてしまいました。

震災三カ月後の六月から、仮設住宅に住み始めました。当時は夫と娘二人の四大家族。仮設

助産師ママの被災体験記

助産師 吉田 百



当時、夫の赴任先の公舎の三階に住んでいた。自分自身は三人目の育児休暇中。生後七か月の娘と年少の次男、年長の長男との五人暮らしだった。長男の幼稚園の卒園式を週末に控えた金曜日の午後二時半ころ、いつもどおりに幼稚園バスが到着し、自宅に入って間もなく、その時はやってきた。今まで生きてきて経験したことのない不気味な地鳴りと終わりが無いのかと思わせるような激しく長い揺れに見舞われ、体調の悪かった長男はベッドの中で布団をかぶり、ただひたすら揺れに耐え、次男は「お父さん、お父さん」と泣き叫び、私はというと、家具が倒れていく室内で、娘を抱いたままテレビを押さえ、身動き一つできなかった。

死にたくない！

津波が来たときは近くの児童公園にいた。転勤族の私にとって何度か早朝の避難訓練をしていて避難場所だった近くの公園が安全な場所と思われ、また、そこに避難したほうがいいのだからと思うて公園に避難した。まさか、津波が河口から二キロも離れている盛川の堤防を超え

てまで溢れてくるなど想像もしなかった。公園で避難してきた人たちと地震について話し始めて間もなく、近くで男性の尋常ではない叫び声があったので道路に出てみると、盛川の河川敷の法面が真っ黒いカーテンに覆われていた。何が起きたのかわからなかったが、本能的に「逃げなきゃ、死にたくない」という思いが沸き上がり、「逃げて」と叫びながら先頭を切って、盛川と反対の山側の市役所方向に走り出した。

七か月の娘は、愛用していた抱っこ紐スリングで眠っていたため、長男を先頭に次男の手を引きずるようにして、踏切を越えてからは「歩けない……」という次男を片腕でおんぶして、後ろを振り向くことなく必死で走り続けた。途中息子は振り返っていたが、私はおそろしく後ろを振り向くこともできなかった。途中で出会った人々には「逃げて」と叫びながら、「死にたくない、死にたくない」という思いで、ただ必死に2kmくらい走った。なんとか四車線の国道四十五号を横切って市役所の坂を駆け上がり、ようやく市役所の駐車場からおそろおそろ走ってきた方向を眺めると、今来た道は水に沈

み、クラクションを鳴らしながら流される車がいくつもいた。そこで初めて「これは津波なんだ」と私たちを恐怖に陥れたものの正体を知ったのだ。現実と思えない光景がそこにあった。

避難所から知人宅へ

その後、避難してきた人たちの流れに合わせて盛小学校に向かい、津波のことをまだ詳しく知らない先生方の誘導で校舎内に入った。避難したホールはとても寒く、余震が来るたびに、その前に鳴り響く地鳴りに恐怖を感じ、ただ震えていた。盛小学校は新築したばかりの校舎だったので安心だとはいえ、余震が来るたびに照明が落ちてこないかとか、常に不安に襲われ、この恐怖の時間が過ぎ去るのを待っていた。

公舎から共に逃げた仲間には娘と同じ位の乳児母子が三組いた。娘には、泣かせたくない思いで、ずっとおっぱいを吸わせていた。果たして吸っていたかどうかは覚えていない。一時も泣かないでくれたことが幸いだった。夕方になり、電気はつかず、廊下にはろうそくを灯し、トイレは行列ができていた。子供と離れるのが怖くぎりぎりまで我慢した。水洗は機能しなくなり汚物で流れなくなり始めていた。携帯電話は電池切れが怖くて電源を切った。おそろく夜九時頃か、炊き出しおにぎり一個ずつが「六十

五歳以上の方から」と言われた。ここで「あれ、小さい子供が最初ではないんだな」と心の中で思った。みんなポケットに入れてきた飴玉一つで静かに眠っていた。いったいいつ子供たちに食料が届くのだろうと心細くもなった。知人から一枚毛布をもらって六家族十九人で抱き合っている寒さを耐えた。そのうち行政からの毛布が数枚配布された。小さい子がたくさんいる私たちに譲ってくれる方もいた。

その後、知人の親御さんが我が家で子供たちを休ませましょうと迎えに来てくれ、ワンボックスカーに数組の家族とぎゅうぎゅう詰になった、市内の知人宅に避難した。その夜、校庭で全く明りが無い夜空に大きな流れ星を見たことも忘れない。避難先には自家発電機があり、地震のあと初めてテレビの画面を見て、未曾有の津波の状況が分かった。宮城の名取の「海岸の状況」、陸前高田「壊滅的被害」、千葉の「コンビナートの火災」という言葉が何度もテレビで流れていた。私達は、お互いに自分の夫のことが心配で言葉もなかった。水が出ないということとで、ペットボトルの水を子供達にも言い聞かせ、ひと口ずつ回し飲みした。和室の続き間に親子六家族十九名お世話になり、身を寄せ合いながら床に就いたが寒かった。枕に頭を載せても余震は相変わらず続き、怖くて子供達を抱きしめながらその夜を過ごした。果たして街は、

自宅は、夫は、一体この先どうなるのだろうか、と押し寄せる不安に支配されそうになりながらも必死に瞼を閉じた。

生きていた！

翌日の朝五時過ぎ、奥さん方と揃って通れる道路を辿りながら公舎を見に行った。あたりはメチャクチャで、道路には物置や車が転がっていた。公舎は一階床下まで浸水していた。フェンスは津波の威力でぐんにやり折れ曲がっていた。部屋に入ると中は荷物が崩れ散乱し、飼っていた金魚も床の上でかわいそうな姿になっていた。昼夜問わず搜索活動についている夫たちに届ける下着等をリュックに詰め、自分の荷物も詰め込み、さらにありつたけ着込んだ。同じ公舎の人たちの車はみな流され、移動手段がなかった。内陸の実家とも連絡はつかず生きていくという報告すらできなかった。避難したお宅には二晩お世話になったが十九人も居候の状態だと、避難中のちょっとした気遣いや、言葉のやり取りに気まずさも感じるようになってきた。長期間体育館等で避難されたご家族は一層つらい思いもされたことと思う。まして乳幼児のいる方はもっと心苦しい思いしたのでないかと思う。

震災翌日の朝は、小さい子供たちをどうしていいかわからず、山の上の福祉の里へ散歩に

行った。福祉の里に、伝言板ホワイトボードがあったので、大槌に勤務していて連絡がつかない実妹の旦那宛てにメッセージを書いてきた。安否情報が知りたかったし、伝えたかった。その福祉の里で知人にバツタリ再会した。二人で「生きていたの！」と抱き合った。海沿いの彼女はとっさに子供と姑さんを車に乗せ、山道を走って山の方に逃げたと話していた。転勤族の津波に対する無知さを痛感した時でもあった。私は車が津波に流されてしまうとは思わず、堤防沿いの道路の渋滞を見て車での避難をあきらめ徒歩で避難したことで、車は津波に飲まれてしまった。ローンを終えたばかりの車で口惜しさもあったが「命には代えられない」と自分に言い聞かせた。

実家への避難

震災後二日目、避難先の知人が内陸でガソリンを入れるために種山を越えた。母子四人を乗せてもらい、内陸の実家に避難することにした。沿岸では緊急車両しか給油できない状況にあった。以前公舎でお世話になり、内陸に転居していた奥さんを頼り炊き出しをした。炊飯器で一分のおにぎりをにぎった。旦那さんからは、同僚を気遣っておにぎり、サラダをダンボールで数箱、コンビニの袋で購入した新聞雑誌、チョコレートなど、細やかな心遣いを頂いた。その

時、映像すら見る暇なく活動している仲間への情報手段で活字による新聞を購入するという彼の行動に感動したことを覚えている。

県南の実家で二週間過ごし、その後子供三人を連れてぎゅうぎゅう詰の満員の電車に乗って盛岡の夫の実家に移動し二週間滞在した。当時はガソリンが不足ということから電車で移動する人々が多かった。

三月最終の日曜日、息子の幼稚園の卒園式がとり行われると急遽連絡が入った。この時は、乳飲み子を抱えて長蛇の列の大船渡行きの特急バスに乗車することができず、姑の判断でタクシーに乗って片道百キロ移動し、参加することができた。現地で活動している息子の無事なことを案じる母の想いや私たちへの愛情を感じた時でもあった。震災前まで普通に園生活を送りながら、一瞬にして変貌してしまった幼稚園の周囲の街並みの中、かろうじて搜索活動用に道が開かれている街の中、手つかずのがれきの山積みの中、長男もみんなと一緒に体験できた卒園式を一生忘れることはないであろう。

予定より二週間遅れの四月十九日に入学式が行われると情報が入り、四月十一日、一か月ぶりに子供達を連れて公舎へ戻った。まだ車は手に入らなかった。

再び公舎へ

公舎の地盤沈下は著しく、配管は数か所破損し、水道は三つの業者に連絡した末、ようやく一か月たってから回復。我が家は震災の時、風呂水をためたまま避難していたので、夫は、留守中の一か月の間、最初は冷たい残り湯で頭を洗っていたと話してくれた。湯船に水を張っておくというのは、私は好きではなかったが、そういうことも役立つと被災して分かった知恵で



3月11日盛川を遡上する津波

あった。当時は公舎の管理人にもなっていたので、自宅以外にもいろいろな場所の破損修理・洗浄等で例年以上に大変だった。とにかく必死に生活する日々の連続だった。

子育てに専念するための、育児休暇を三年取得したつもりだったが、振り返ると、三・一からの一年間は、ただ必死に生きていたように思う。長男が小学校に入学し、楽しい新生活なはずなのに、震災後はうまく声掛けする時間もなく、子育ての、自分自身の辛い部分をぶつけていたかもしれない。夫は、落ち着くまで休み返上の生活をしていたため、私も相当ストレスがたまっていたのだろう。時々、「大船渡の時は、母さんはいつも怒っていた」と長男に言われる。自分自身がやらなくてはいけないことに追われてしまい、子供に対してさみしい思いをさせてしまっていたのかもしれない。週末のたびに震災のイベントに積極的に連れていき、楽しい思いを体験させようとしたつもりだったが、日常生活の些細な幸せが必要だったのかもしれない。

次男は、妹が生まれて、今までずっと一緒だったお兄ちゃんは小学校に入学し、年中になり自分一人で幼稚園に行く新しい生活環境なのに、私自身は気持ちに余裕がなく、次男に読み聞かせをした記憶が全くない。そのことが影響しているのか、気づいたら次男は本を読むことが少

ない子になっていた。今春小学六年生になろうとしていますが、今になりやっと母子の心身のスキンシップを取れるようになった気がする。今では、私が留守の際にご飯を炊いたり、就寝前に脚をマッサージしてくれたり、心の支えとなつて逞しさを感じている。大船渡が大好きで、「将来は大船渡で働いて、お母さんたちがいつでも泊まれるようにしてあげる!!」と言っている。

震災前の七月七日に大船渡で生まれた末娘。七夕のその日は病室の窓からは、快晴の下、大船渡の青い海が一面に輝いていた。

三・一一の時は、まだ離乳食が開始になったころ。しかし、環境も一変し、避難中は気持ちも不安定になった私の枯れた乳を気休めに吸わせ続けたため、保健センターの健診では成長曲線のボーダーラインをたどっていた。助産師としてじっとしていられずに、五月からは、地域のママサロンのお手伝いも母娘で参加して元氣をもらった。娘を介して産前産後のママたちに元氣を与えるきっかけにもなったかもしれない。今そのサロンで知り合ったママは、内陸の娘のクラスをサポートの先生をしている。震災を体験したが、あの時に得た絆は今もここで生きています。娘自身は、津波のことを記憶にないが、私の今年の三月十一日の手帳に『つなみの日』といつのまにか記していた。

世の中の三・一一とともに、我が家にとっての『あの日・あの時』のこと。これからも可能な限り、家族全員で思い出して話していきたいと思っている。

みんなに支えられて、見守られて、協力して、前に進んだこと。そして、今があること。当たり前の生活に感謝すること。今後起こりうる災

陸前高田市・被災地の助産師

助産師の大上静枝さんは、大震災で義姉さんを亡くされ、ご実家は浸水し保有していた船も流されるといふ被災をされながら、被災地の子育て支援活動に参加されてきました。

下記の内容は、伊藤がインタビューした彼女の体験です。(平成三十年二月三日)

東本大震災の三月十一日は、午後から市の保健師同行の家庭訪問の日で、広田半島方面を回っていました。一件目が終わり、二件目の訪問宅にいた時大きな地震がありました。その御宅は海岸がすぐ目の前でした。(長洞観光前)保健師とつさに「帰ろう!」と訪問を中断して車に乗りました。その時の車内の時計が十四時五十九分。なるべく山際道路を走り、市役所へ急ぎ戻る途中、バイクと軽トラ事故を目撃し

害に備えて生きていく必要があること。災害が起きたときに何をするか考えられる人間になること。

大船渡での生活の思い出があるから、私たちが家族は今後も、大船渡のみんなとつながって生きていきます。そして、これからも応援していきます。

助産師 大上 静枝

(聞き取り・伊藤)



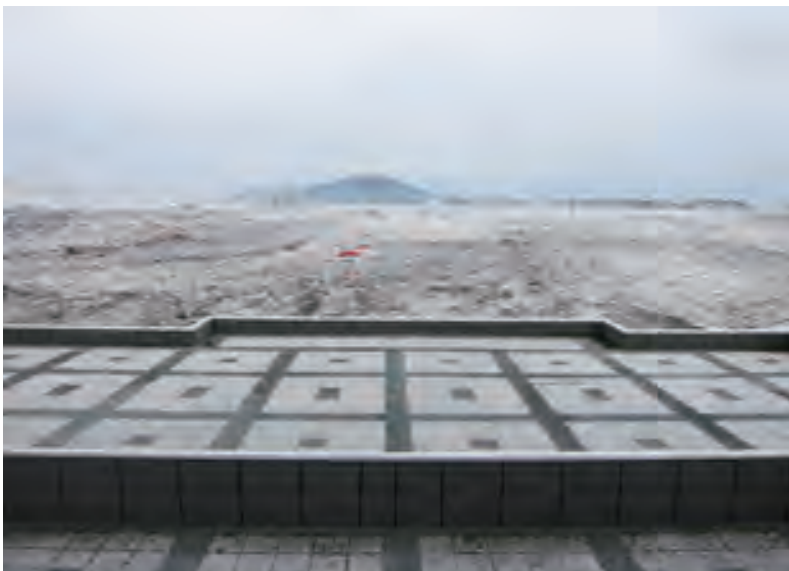
ました。バイクの運転手が横たわっていたので、同行保健師が「大上さんどうしましょう、救急車を呼びましょうか?」といいましたが、「何言ってるの!波がくるよ!」と彼女を止めました。横たわっていた人も起き上がったので、車を走らせました。あそこで手間取っていたら、自分たちが津波にのまれていたと、後でぞっとしました。市役所に着くと、役所前の公園には、避難した人たちが黒山の人だかりでした。公園の中にいた人たちは、皆寒さで震えているので、私は自分の車から、ジャンパー一枚を知人の保健師に、赤いカーデイガンを栄養士に渡しましたが、その保健師は体育館に避難して、そこで亡くなってしまいました。私は自宅に戻りましたが、不思議なことに周りは騒ぐ人も見えず、

全く普段通りの近所でした。

その夜、ラジオが何度も「陸前高田市は壊滅状態」と繰り返し放送され、県立高田病院に入院していた母の安否が心配でなりませんでした。放送の中で、高田第一中学校が避難所になったということを知り、翌日リュックの中に買い置きしていた手指消毒液三本、飴玉、羊羹などを詰めて、母を探しに高田第一中学校へ向いました。その中学校はかなりの高台なのに、入口まで瓦礫が押し寄せ、重なりそれにまず驚き、そして姿のなくなつた、平らな陸前高田のまちを初めて目にしました。その避難所の中で母の主治医だったS先生に会いました。その姿を思い出すと、今でも胸が潰れそうです。あの寒い体育館で、膝丈の裾が泥だらけの病衣に、ビニールのエプロンを付け、素足にサンダル履きの姿で、被災者の救助活動をしておりました。こんなところで、こんなに人の命を守るために頑張っている、私は自宅に戻り、近所からズックや下着、セーター、モモヒキなどを集めて大きな袋に詰め、又避難所に戻り先生に着替えるよう一式お渡ししました。S先生の姿に泣けて仕方がありませんでした。先生は、九十三歳の母が県立高田病院に入院した時助けて頂いた先生です。某病院に腰の激痛で救急車搬送された時、自宅に帰され、その後も毎日痛みを訴えたので、今度は高田病院を受診。腰椎圧迫骨折の

診断で幸い入院になり、その時の主治医がS先生でした。その母が経過も安定し三月二十日頃の退院を控えて、病院で津波に合つてしまいました。その津波が襲つた時、誰かが母の手を引き、おぶつて屋上まで運んでくれたということです。窓から波が見えたと後で母が言っておりました。

翌日の避難所では母は見つかりませんでした。でも出会つた看護師から「婆ちゃん(母)は病院の屋上から、ヘリコプターで内陸の花巻



押し寄せる大津波 3月11日県立高田病院の屋上から(東海新報社「鎮魂」から)

に運ばれたよ、生きているよ」と知らされました。

その後数日間は、避難所に通いましたが、余りにも被災者が多く、顔見知りの人たちだけに、おしり拭き、綿入り半纏、おりものシート、タオルなどを数枚ずつ渡すことで精一杯でした。その中のお一人は、たった二、三枚のおりものシートに感謝して、後日、菓子折り持参でお礼に参られました。看護師からは消毒液がとても助かったと感謝されました。普段買い置きをしておき本当に良かったです。自宅では、お寺に避難していた知人の、全く他人のご家族四人をお預かりしたりしました。

避難所に衛星電話が設置されたので、並んでようやく母が生きていると実家に連絡できた。実家も義姉が行方不明になり、家も浸水の状態でしたが、甥が母の元に駆けつけ生存を確認でき、その後私も一週間位してようやく、住田町でガソリン給油に二回並び(一回二千円のみ給油)、花巻病院に搬送された母に会う事ができました。母は表情が全く無くなっていて、仮面顔のようにポーとしていて、普段の顔になるまで一ヶ月くらいかかりました。

津波直後ですが、余震が繰り返して怖かったので、自宅近くの床屋さんで過ごした時、そこに居合わせた方に、お餅を焼いて御馳走したことがありました。自分は忘れていたのですが、

その方は覚えていてくれ、偶然母の受け入れ先となった病院の職員でした。事務長さんに相談するよう教えて頂きお会いしたところ、ナント、その事務長さんは、私が退職後に市役所依頼の「家庭訪問」をしていた時の、元課長さんでした。「今日亡くなった方がいてベット一台空いたばかり」と。只々偶然が重なり、人と人が繋がり、母は花巻から九日目頃に、地元の病院に移転することができました。人を助けると、このようにぐるぐる回って結局自分が助けられるんだなあと身に染みて感じました。

震災後ですが、行政から依頼された新生児訪

避難所のボランティア体験記

助産師 伊藤 怜子

東日本大震災からすでに七年という歳月が流れた。平穏な日常に恵まれていても、当時の記憶は断片的とはいえ、脳裏に深く刻みこまれている。走り書きの様々なメモから、当時の状況を辿ってみた。

大震災当日〜四日間

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分

その瞬間、自宅で激震にうろたえた私は、とっさに居間の大きな人形ケースを、必至で抑えていた。駆けこんできた主人の「外に出ろ！」

間に向いたところ「実家が流され、家族全員亡くなりました」と、遺骨四体を嫁ぎ先に置いていた方もいました。又、一月か二月頃中国から嫁いだ方に、保健師と妊婦訪問したことを思い出し、三月末に訪ねてみたところ、母乳分泌が良好にも関わらず不足と思いいミルクを補充してました。

体重計がないので、赤ちゃんを発泡スチロールの箱に入れ、移動販売用の天秤はかりで体重をはかり、チェックして、沐浴指導も行い、自分の携帯番号を知らせて困った時は連絡するよう伝えた方もおりました。

という怒鳴り声で、慌てて裸足で庭に飛び出すと、目の前の大船渡湾が真っ黒な色！

湾が一望できる我が家の道路前に、数人の隣人が集まり、「津波だ！津波だ！」と騒ぐ声がしてきた。真っ黒に変わった大船渡湾の湾口防波堤は、大きな波しぶきに覆われて、見る見るうちに、堤防の灯台も浪間に消えてしまった。湾内の珊瑚島の海面がゆっくり上下して、引き波と押し波の様子が分かり、その海面にできた渦に、航行していた一隻の船が呑まれ：見えな

くなった。海面が濁流のようになり、船やカキ棚、流木や家やごみ等がすごい勢いで、末崎方面から大船渡市街地や赤崎町方面に流れていった。

その内フト、気づいた。急ぎ家に入り、ティッシューパー、タオル、ビニール袋、血圧計、体温計、葉箱などシヨップバックに詰めて、近くの地区公民館へ急ぐ。

十六時前頃か、下船渡公民館二階には、避難者が七十数名位。小学生数人、乳児を抱えた母子四組。その一組は母の背中で火がついたように泣き続けている、泣き止まない乳児に母親は集団を離れ、階段や階下を行ったり来たり。双子の二歳位の兄弟が、無邪気に被災者の間を駆け回っていたが、それを叱る声もなし。

看護師はどうも私一人らしい。「伊藤さん、ここはお願いね！」と婦人部長さんに集団の大広間を任せられ、自然に看護師の役割で動き回っていた。

幸い公民館は畳敷き、発電機が持ち込まれ電気もつく。避難した方々は、地域婦人部炊き出しのおにぎりを黙々と口にしていた。集められた毛布で三々五々毛布にくるまり身を横たえたが、かなり寒い。ぎりぎりの枚数か。途切れ途切れの会話から茫然自失で、言葉も出ない様子が伝わってきた。

夜も更けてから子供の泣き声がある。一人の

母が、今晚飲ませるミルクがないと訴える。母乳はもう出ずミルクだけだったと。他の三組の親子は混合栄養で、余分なミルクもなし。水もガスも出るのに、分け合うミルクがない。気の毒で、「もらい乳」とも言い出せない。今晚さえ乗り切れば何とか、と重湯の準備をしていたら、婦人部の友人が「もしかして、あの家にミルクがあるかも」と教えてくれた。

彼女と二人、真つ暗な地域を車のライトと懐中電灯を頼りにして、ようやく探しあて、四本のミルクスティックを分けて頂き、何とか災害当夜を乗り切った。

三月十二日

翌日からは、半壊の自宅二階からミルク缶を持ち出せた若夫婦のお陰で、救援ミルク到着まで分け合い間に合った。オムツは支援物資がくるまで、皆である分を仲良く分け合う。被災者には婦人部の炊き出しで、温かい汁物とおにぎりが準備された。私は看護師目線で、老弱男女問わず、食事、睡眠、排泄、感染予防、健康など、徐々に声掛けをして、自信もないまま「看護師います」の張り紙をした。妊婦さんはいなかった。

手持ちの機材や物品で順次、次のようなことを行った。

①毎朝、検温と希望者の血圧測定

②熱発者の隔離

③インフルエンザ予防（うがい・塩水、部屋の換気、咳の出る人マスク、）

④部屋の掃除

⑤トイレの清潔：バケツで井戸水を汲み置き、使用の都度少量流す。手洗い励行の張り紙と消毒薬の準備。

⑥起床後の体操

※①②を毎日行うことで、気持ちが少しでも落ち着かれたかも知れない。

※マスク、消毒薬等を婦人部の非被災者からカンパ。

比較のお元気なおばさん達が、細々した仕事を手伝ってくれた。

（お手ふきの洗濯、食事の準備と片付け、トイレの水準備、階段や部屋掃除等）

四日間が過ぎ私は初めて、大船渡保育園付近の高台から被災した町の一部を見ることが出来た。大船渡湾を望む残骸だらけの工業団地視界にただ啞然。人の気配が感じられない。思わず数日前出会ったばかりの「母子相談室」のママたちが浮かんできた。「一体何処に、どうなつて…」と、助産師モードになっていた自分だった。

三月十四日

七十四歳女性が避難してきた。話がはっきりしない。「三月二十五日に人工透析の予定になっている？インシュリンを注射する予定？…」

薬携帯なし。終日臥床しているので、病院に同行して受診する。糖尿病の意識混濁初期と分かる。避難所は最高齢九十二歳。八十歳以上八人。毎日検温と血圧測定でコミュニケーション。薬の携帯者は三～四人のみ。病名、内服薬名も分からず、会話から推測するしかなかった。高齢者は早め早めに医療団のいる避難所に付き添い、診察を受けた。

三月十五日

大船渡市保健センターから助産師が必要と迎えあり。以後四日間を、盛小学校避難所の「仮設新生児室」と兼務する。

三月十八日

避難所に支援物資が来るようになった。

①被災者のリーダー？と相談して日課表を張り出す。体操、部屋の換気、食事時間、健康チェック時間など。

②マスク、コップ各自一個ずつ配布。

③布で囲いをつくり、女性のみ陰部清拭…パンツを裏返しナプキン使用。

三月二十一日

ようやく医療団が来る（徳洲会）。伊藤不在で被災者の様子を伝えられなかったが、体調不良者が診察を受けられ、薬の処方がされたと聞き本当に安堵した。「看護師」の張り紙をしたもの、臨床をはなれて数年過ぎ、しかも助産師故、一般疾病に自信なく、不安な毎日のボラン

ティアだった。

三月二十五日頃

ボランティア男性心理療法士?と会話中、思春期の女子が興奮して泣く。津波のフラッシュバック?↓不審者ということもあるので心配になり、ボランティア団体に問合せる。心理療法士に間違いなかった。以後、外部者は必ず受付記録を依頼した。便秘、下痢、高血圧の方が多かった、働き盛りの四十〜五十代男性が一八〇以上と高い。が、被災自宅や、親族の安否確認等で日中休めない。なるべく早く受診するようにと勧めるだけで術がなし。

避難所で時間のゆとりが出ると、地域の母子が気になってきた。

公民館のボランティアの合間をみて、支援物資のオムツ、離乳食、ミルクなど車に積み、回ることにした。ガソリンの心配は後だ。動く前に母子の所在情報をつかもうにも、地域の状況があまりにも変わってしまい、地元の人も首をかしげる人多し。保健センターの情報もなし。数日間かけて単独巡回する。ミルク、オムツに関して以下のような事情が解った。

○避難所に物資が届いているのを知らなかった。
○車なく、取りにいけない、買いにもいけなかった。

○住所がここに無いので、もらえないと思ってた。

○あるところが解らず、盛岡、遠野まで買いにいった。

○何回ももらえないと思っていた…等々。情報が届かない中、転入者含め二十五組の乳幼児母子が被災地域に散在し、我慢を強いられていた。乳児をおんぶし、幼児を連れてみぞれの降る寒い中を、ミルクやオムツ買いに並んでいた頃だった。回って本当に良かった。チラシを回せば良かったと後で気づいた。

〈避難所ボランティア感想〉

①災害にも強い、母乳育児の推進。

②備蓄品にミルク、哺乳瓶、オムツ、ナプキン、水、カイロ、電池等を入れる。

③震災翌日からは「生活」。食べること、寝ること、排泄、清潔など、被災者は声を出せない。男性は生活面に気が回らない。女性目線の配りで、二次災害も予防できる。

④自分が折れないためにも、二人、三人に声掛けして一緒に動く。協力の知恵は強い。

〔「大丈夫」の声かけが、自分への励ましにもなる。〕

⑤元気なおばさん方に(Aさん、Sさん)に、毎日の仕事を割り振りした。

子どもはスリッパを並ばせる、ゴミひろい、水汲みなど役割を与えると良く手伝ってくれた。小学生、中学生は褒めて、仕事を頼む、係

りを作る。

⑥岩手県より、トイレの強姦に注意の呼びかけあり、トイレには必ず二名で行くように伝えた。トイレの電気必要。

⑦避難所に事務所を守りながら地域のご老人たちが待機。地区の名士?からは支援物資が受け取りにくいとの声があった。一人でも女性がいいたら受け取り易かったと思う。

⑧男性は、食料の調達、支援物資の取り扱い、外部交渉、連絡、防火点検、運転などで避難所を維持していた。避難生活者の間に、物資の配布、事務方の言葉遣いなどで徐々に不満ができていた。避難所に生活目線を持つ仲間者(女性!)が是非必要。

震災翌日からは「生活」目線が欠かせない。女性を災害対策委員に!

当地区の避難所では、部長さんはじめ婦人部の方々が奮闘。本当にお疲れさまでした。

四月五日

避難所も落ち着き、滞在者も少なくなったので、ボランティア終了する。



避難所の仮設新生児室にて

助産師 伊藤 怜子

大震災四日目、ポランティア中の地域の避難所に、大船渡市保健センターから迎いの車が来た。大船渡病院出産母子の、退院後の一時避難所として「仮設の新生児室を設置」し、緊急に

あり。簡単でも医師の紹介状があり安堵。その紹介状と産婦との会話で大体の個別把握をした。以下に当時の記録をまとめた。

≪三月十五日の入室状況≫ 五組母子

助産師が必要と。その場から盛小学校の避難所に向かう。校内の保健室に設置された「仮設新生児室」には、児童の二台のベット、床に二組の布団が準備され、すでに二組の母子が入室していた。校内で唯一水が出る部屋らしい。が、配管は故障。お湯は少しなら使える程度。二十四時間駐在の保健師が一人、養護教諭が一人いたが、校内の多数の避難民の対応で、追われていた。大船渡病院は被災者が溢れ、大変な状況と保健師が口早に伝える。この部屋設置は、退院許可が出ても家族と連絡が取れない、道路が破壊され帰宅できない、自宅が流された、ライ

A子・産後七日目 自然分娩、経産婦、母乳二十cc位と。自宅流出。

十六時頃家族の迎えあり、夫の兄宅水沢市に当日移動する。

B子・産後六日目 自然分娩、初産婦、母乳のみ、右耳？やや難聴、自宅も実家も流出。

ラインが寸断し家屋半壊状態で生活できない、など等、帰宅不能な褥婦さんたちの一時避難所。新生児を抱え産後間もない心と体にこの現実、過酷過ぎて慰めの言葉など思い浮かばない。が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

C子・産後六日目 自然分娩、経産婦、家族と全く連絡とれず。上の子供を連れて実家に里帰り中。入院中に実家が流されてしまったらしい。産後六日目で仮設新生児室に移動。今日まで実家に預けた上の子供の生死も解らなかった。間もなく父親の迎えあり、家族や子供の無事を確認し、声を上げて泣き崩れた。帰宅。

が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

D子・初産、二十一歳、母乳のみ、二ヶ月の子供と県立病院避難所から移動した。

が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

E子・産後六日目 自然分娩、初産婦、母乳。釜石の家族と全く連絡が取れず。

が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

※オムツ、お尻拭き、ウエットティッシュ、ミルク、飲料水、寝具、消毒薬などはありません。

が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

※マスクが押し寄せたが対応しきれず、ひきつった顔(?)で「マスクミお断り！」の張り紙と、廊下から見えないよう、ガラス窓をふさいだ。

が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

≪三月十六日の入室状況≫ 五組母子

が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

E子入室 二回経産婦、三十七歳

が、声を掛けながら、思いつく限りの新生児の入室環境と整備を急ぐ。準備中にも入室者

生後一ヶ月児と同建物保育室避難中。同室の保育園児達の騒がしさで児が眠れないからと、母訴えあり転室となる。夜間は家族の避難場所に戻る。

昼頃、F子さんに家族の迎えあり。家族は釜石へ大船渡まで寸断された道路を、迂回、迂回し危険をおしてたどり着いた。衣服も汚れ、疲労困憊の様子。涙と笑顔で、家族が代わる代わる赤ちゃんを抱く。部屋は涙と喜びに包まれる。自宅を流され、産後の娘を案じて校庭で車中泊していた一人の実母に気がついた。娘のベツドサイドに案内し、同室の寝泊りを勧め付き

てもらおう。その後、このお母さんには色々お手伝いして頂き、助けて頂いた。

《三月十七日入室状況》 三組母子

今日からこの部屋を自宅と想定して、自立生活をとレーニングすることとした。二人一組になつて赤ちゃんの体重測定、清拭、観察記録などを行う。帰宅しても自力で過ごせるよう、三人のお母さん頑張る。

《三月十八日の入室状況》 三組母子

前日学習のトレーニングの復習をする。お互い協力しあつて合格！各自で「赤ちゃん経過表」に記入とした。

保健師が二十四時間待機し、環境もほぼ調整。全員完全母乳でトラブルなし。乳管開通を多少ケアしたのみ。四日間の支援状況から、助産師不在でも母子の生活は保持出来る、と判断できた。地域の避難所も気になり、三組の産婦を申し送り、避難所に戻る。B子さんに付添う実母さんのご協力に感謝し、引き続き部屋の掃除などをお願いした。

表示チラシ《お母さん方へ》

①各自、健康管理に努めましょう。

↓ 特にうがい、手洗いの励行

②事故に注意しましょう。

↓ 赤ちゃんの転落、やけど、盗難など

③経過表に赤ちゃんの記録。

↓ 体温、体重、便回数、変化等

④清拭、体重測定は必ず二人一組で行いましょう。一人は赤ちゃんの側を絶対離れない。

⑤暖房の調節はこまめに。

⑥体調不良や困ったことは直ぐ、保健師に相談しましょう。

【四日間のケア内容】

①感染防止指導

②母児の健康チェック

③産後の保健指導

④赤ちゃんの世話（清拭、体重測定）

⑤授乳アドバイスと乳房の手入れ、その他。

⑥清潔が保持できる環境整備

⑦使用物品の清潔、不潔の表示

⑧入室中のルール作成。

【困ったこと】

①避難所の一角という劣悪な環境で、感染の危険性大！かつ、地元の避難所と掛け持ちする自分が、感染源になる恐れがあった。

②トイレが校庭のはずれで遠く、産後の身体が夜間の寒さにさらされた。

③入浴、洗髪できず母児共に着替え少なし。

④マスコミの対応ストレス。

⑤余震が頻回で不安だった。

【良かったこと】

①大船渡病院医師からの、簡単な紹介状でパニックにならずに済んだ。

②入室者全員が母乳のみで過ごせたこと。

③母親同志が知恵を出し合い、創意工夫で助けあったこと。

④地元の避難所より、食料は恵まれていた（冷肉、菓子類分けて頂き、避難所の子供たちにお土産にす）

感想…

入室母子の暗い状況と前途に、かける言葉、支える術がないようだった。責任の緊張感で、乗り切りきつたような気がします。自宅を流され、帰宅できないお母さん方は、ナイナイ尽くしの中で知恵を出し合い工夫し合い、冷静に過ごされた。その理由の一つに、全員がほぼ確立していた母乳の力が大きかったと思われる。あらゆるリスクの中で、授乳でどれほど心が和んだことか。母子が一体になり、余震の中でもしっかりと見守っていた。そして何より、赤ちゃん達が、お母さんたちの希望を繋いでくれたこと、確信しました。

四日間、我が家の自家用車のガソリンなく、多忙な保健師さんに盛小学校の「仮設新生児室」に送迎して頂き申し訳なかつたです。「仮設新生児室」は三月三十一日閉鎖と後日知りました。

